

研究室配属実習レポート

学籍番号 9 0 氏名

研究室配属を通して最も学んだことは実験のリアリティである。この作業をすればできるということは授業で教わっていても、それが実際にどのように成り立っているのか、そして具体的にどのような作業をするのかということが体感できた。数学に例えると、解法の大筋というよりは、積分の計算をしたり、使っている公式の証明をする部分に当たると思っている。

装置の温度が多少異なるだけで想定通りに増えてくれない細胞。細胞の保存方法によって状態が悪化する場合もあるが、資金の関係で必ずしもすべての細胞に対してベストな環境を作れるわけではないという実情。細胞を剥がす過程などでは、薬液を勢いよく出してよい時とゆっくりと剥がれないように流すときがあるなど、実験の一作業ごとの意味を考えて行う細かなテクニック。研究職に対して、これまで抱いていた「理論をこねくり回すエリート」というイメージから、どちらかというところ「社会と戦うビジネスマン+知識を備えた技術職」へと変化した。医学部の研究というのは圧倒的に後者が多いと感じている。

また、桑迫先生はご自身の臨床医としての経験から、現場に関して様々なアドバイスを下さった。世の研修医がぶつかるであろう細かな実体験は、きっと数年後に役に立つと感じている。特に注射の話が何度も話題に上がった。私には、あのような見えるか見えないかわからない細い管に、さらに細い針を刺すといった芸当などとてもできそうにない。ちなみに、私の祖父は極めて血管が見えづららしく、広大病院で最大 8 回もの失敗をされたらしい。若い医者が泣きそうになっていたと祖父は笑いながら語っていたが、私もそのような患者に出会う日が来るのかと、今から少し恐ろしい。

私は、将来の進路をまだはっきりとは決めていない。臨床医になって労働基準法無視の現場で働くのか、研究医になって数少ないポストを争うのか、それとも保健所でのんびりと健康診断をするのか。どれも様々な魅力と苦勞がありそうに迷っているが、当然いつかは決めなくてはいけない。その時に、この研究室実習の経験は活かせるものである。臨床は初期研修と病院実習、研究はこの実習、保健所は公衆衛生学の実習と、やはり医学部のカリキュラムは進路を決めるにあたってうまく作られていると思う。